

【研究ノート】

ウェディングドレスについて

Wedding Dress

田原 美津子

TAHARA, Mitsuko

Ⅰ. はじめに

短期大学のドレスクリエーションコースでは、選択科目として「ドレス制作」を開講している。内容は前後期各1単位で1年をかけてフォーマルウェアを制作する。現在開講6年目を迎え、短期大学の学生の中には、この科目を履修するためドレスクリエーションコースを選択する者も少なくない。

また、履修学生の多くがウェディングドレスの制作を希望する。しかし、服飾の基礎を1年学んだだけの学生が、シルキーな素材や透ける素材などの難しい素材を初めて扱うことになり、指導にも試行錯誤、創意工夫が必要とされる。授業を行っていてウェディングドレスのデザインに関する雑誌や資料は多くあるが、学生に合わせたパターン、縫製の資料が少なく不便に思うことがある。

そこを埋めることが出来ればと2005年からの「教職員研究作品集」掲載に合わせこの研究を思い立った。

まずは、過去の学生作品の中から、学生が制作する頻度の高い(好む)シルエットを取り上げ、パターン、縫製を研究し、制作を行った。

Ⅱ. ドレスのシルエット

ドレス制作の中で学生が好んで制作することの多いシルエットを選び、ギャップ発行の「オートクチュールコレクション」の中から例として抜粋した。

(1) マーメイドライン

上半身から腰、膝のあたりまでピッタリと体にフィットし、膝下からギャザーやフレアーをいれて裾が広がっているデザインのこと。マーメイドとは人魚の意味で、裾を尾ひれに見立て、ドレスラインが人魚



図1 2007 S/S
GIORGIO ARMANI PRIVE



図2 2007 S/S ELIE SAAB

のように見えることが名前の由来。フランス語で「魚のライン」という意味のリーニュボワンと同義。(図1、2)

(2) プリンセスライン (プリンセススタイル)

このスタイルには、2つの意味を持つシルエットがある。

①横での切り替えがなく、身頃に縦方向にダーツを入れることにより身体のラインに合わせた。スカート部分はフレアー型になる。英国国王エドワード7世の王妃アレクサンドラが皇太子妃時代に好んで着たのでこう呼ばれている。(図3)

②上半身はウエストまでフィットし、腰から下のス

カート部分はギャザーやフレアーでふんわり広がったスタイル。パニエの量でスカートのボリュームを調整する。いわゆる「お姫さま」型なのでこう呼ばれている。(図4)

(3) ベルライン

スカートのシルエットが釣鐘のような形状になっているスタイル。スカート部分にギャザーをたっぷりと寄せ、ウエストを細く絞り、腰まわりを膨らませて、裾でまっすぐに落ちていくライン。

「鐘」という名称の通り、ウエストを絞って腰回りを膨らませた型。ベル&ドームラインと呼称されることもある。(図5、6)



図3 2007 S/S ZUHAIR MURAD



図5 2007~2008 A/W
VALENTINO



図4 2005 S/S EYMERIC FRANÇOIS



図6 2007~2008 A/W
GIORGIO ARMANI PRIVE

(4) エンパイアライン

直線的なシルエットでクラシックなラインのドレス。ハイウエストが特徴。バストのすぐ下で切り替えているものをエンパイアスタイルと呼ぶ。

裾がバストの下から直線的に落ちていて、ほとんど広がらずギリシャ神話の女神が着用しているようなハイウエストのシルエット。ナポレオン第一帝政の頃に流行したクラシックスタイルで、エンパイアとは「帝国、皇帝の統治」という意味。(図7、8)



図7 2006～2007 A/W
ON AURA TOUT VU

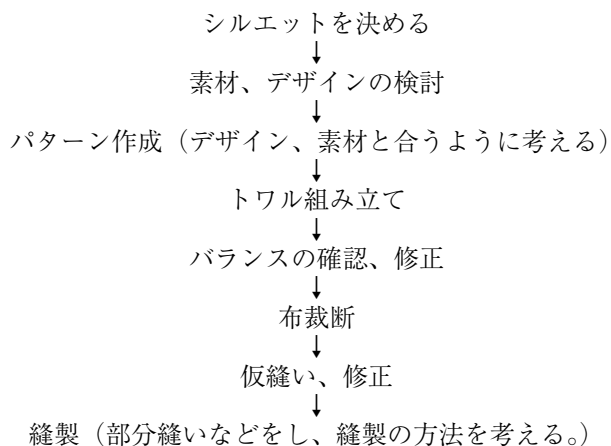


図8 2005 S/S CHRISTIAN
LACROIX

Ⅲ. 作品制作

本学の「教員研究作品集」において、過去3点の作品はドレス制作で学生が制作することの多い(学生の好む)シルエットをもとに選んだ。やや大人っぽく体にフィットした形のマーメイドライン、対象的に可憐で若々しくパニエでスカートにボリュームを持たせたベルラインの2種類のシルエットをもとにデザインし制作した。

素材は、学生が制作する際に入手しやすいものを考慮して選定した。また、素材に合わせた縫製方法の研究を行った。制作には、AMIKO FASHIONSのDORESS FORM8Tを使用し、製図はドレメ式原型を用いた。工程は下記の順序で行った。



—2005年の作品—



図9 2005年作品のデザイン画

女性らしいシルエットは強調したいが、学生にとって初めて丈の長いフォーマルドレスを着ることになるため、身体を締め過ぎず自然なラインとなるようウエスト回りにゆるみを加えた。シルエットを甘くした分、胸元の切り替えラインとレースで女性らしさを演出した。スカートは、歩き易くするためとヒップのラインを強調するようにやや高い位置からフレアーを出すように作図した。またマーメイドラインは、ボリュームが裾に集中し重心が下になってしまうので、トレーン部分にラッセルレースを使用し軽い感じを出した。また衿、ヨークに同素材を使用して統一感を演出した。このレースはソフトチュールに白と銀の糸で刺繍がされていて柔らかい質感があり、更にデザインの意図にふさわしい華やかさも感じられたため選定した。縫製では、レースの縫製に重点をおいて制作を行った。

プリンセスラインのワンピースは、切り替え線の取り方により印象が異なる。下図 A から D を比較すると D のようにウエストで切り替えた場合より丈が高く感じられる。また、プリンセスラインの 2 本の切り替え線の間隔によって、若干の錯覚現象が起きる。A は切り替え線の間隔が狭いので間隔の広い C より高さが強調され縦長にみえる。逆に C は切り替え線の間隔が広いために幅が強調される。側面から見た場合は、逆となり C より A の方が幅が強調される^(※1)。(図 10)

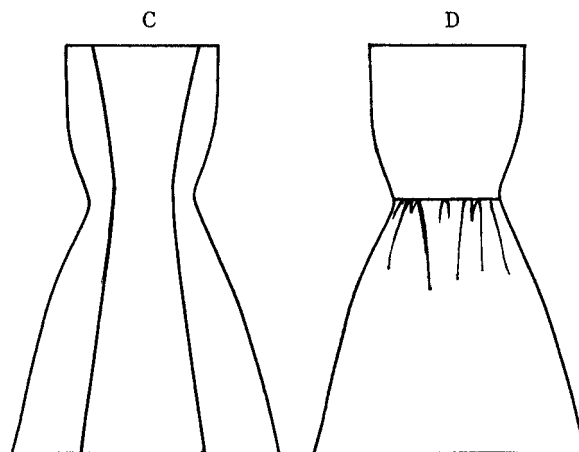


図10 ワンピースの切り替え線

ゆるみ
B-4
H-2

3
1.5
1
3
9
3.5
23.5
文 115
11
11
11

1.5
1
8.5
0.5
1.5
あき
11
13
文 115
6
6
6
30
30
30
30
40

3.5
袖付け寸法
2
下前持出し

图 11

製図では図10を考慮しプリンセスラインは、身体の立体、丈とのバランスを考えた位置と線にした。

トレーン部分はレースのゴージャス感と優雅さを強調するため、裾で60cm 切り開いた。

〈材料〉

表地 プライダルサテン…ポリエステル100%

レース チュールレース…ポリエステル100%

銀糸

裏ヨーク ソフトチュール…ポリエステル100%

裏地 シルック…ポリエステル100%

糸…ポリエステル糸 60番 (ワンピース)

90番 (レース部分)

コンシールファスナー

接着芯 R100 (衿、見返し)

〈縫製について〉

*レースの接ぎ

トレーン部分は布幅が足りないため、レースの柄にあわせて接ぎ合わせた。

規則的な花柄だったので、縦地方向で花が比較的に密着しているところを選び、花の片側を柄に添って切る。

一方の布は、同じ花柄の反対側を柄に添って切り、柄がずれないように重ね合わせる。

表に針目が出ないように裏側から返し縫いで2枚を止める。

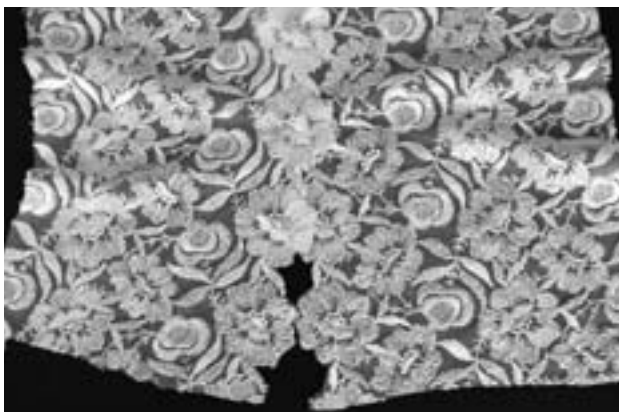


図12 柄を重ね合わせる

2枚の布を重ねることでその部分だけ布が厚くなり硬くなるため、ドレスのシルエットを崩さないように接ぎ位置を決める。(図12)

*スカラップ

トレーンの裾部分の始末

レースのヘムラインは、縫い代を折ると柄が重なり美しくない。また、断ち切りも柄が崩れてしまう。そこで布の両端のスカラップを利用し、レースの裾に縫い付けた。スカラップを付けることで、曲線の流れを作り裾にリズムを持たせることが出来た。(図13、14)

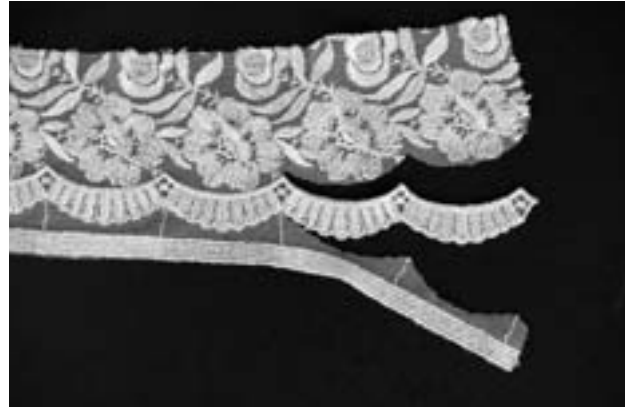


図13 スカラップ部分を切り取る



図14 スカラップを縫い付ける

*衿

スタンドカラーは、製図のままレースを裁断すると柄が崩れてしまう。(図15)



図15 スタンドカラーの裁断

レースを衿幅で直線裁ちし、ぐし縫いをして型紙に合わせてアイロンで形作る。(図16)



図16 直線に裁ち、ぐし縫いをする

表衿はレースにサテンを裏打ちし、裏衿はサテンに接着芯を貼って仕立てる。(図17)



図17 スタンドカラー

*ヨーク

ヨークはレース1枚では身頃を支える事が出来ない。

レースの透け感がデザインのポイントになるため無地のチュールを裏ヨークとして中表に仕立てる。縫い代はできるだけ細く切り、衿、身頃とはさみ付けをして透け感を妨げないようにする。(図18)



図18 衿、ヨークの完成

完成作品



図19

—2006年の作品—



図20 2006年作品デザイン画

この作品では、透ける素材の縫製を模索しながら制作を行った。

パール平型ビーズ

ゆるみ
B-10
H-6

1.5
倒
9

4 8.5

2 0.5 0.5 2

たたむ

開く

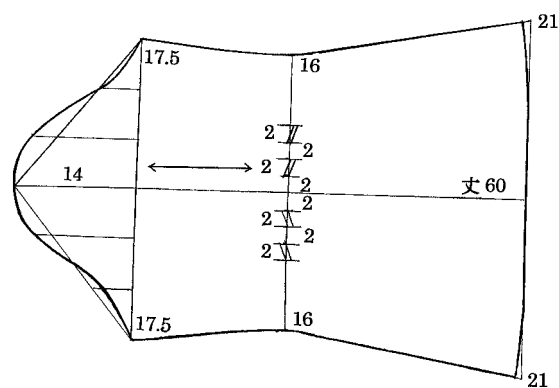
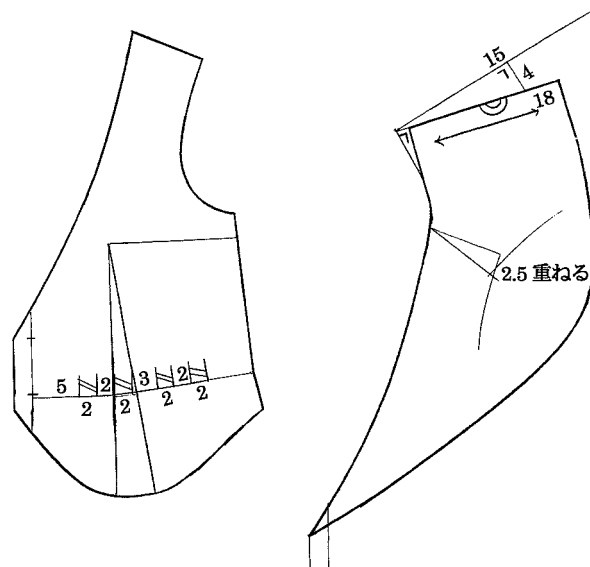
9 11.5 24

8.5 5 1.5

0.5 0.5

2 2 2 2 5 2

24 20



袖口は袖幅を広く取り、肘にタックを取って見頃とディテールの統一を図った。ウエストを細く見せるために水平の切り替え線の位置を下図 A から C で比較してみると A のハイウエスト、C のローウエスト位置より、最も細い位置で切り替え線を取る B のウエストが細く見える^(※2)。

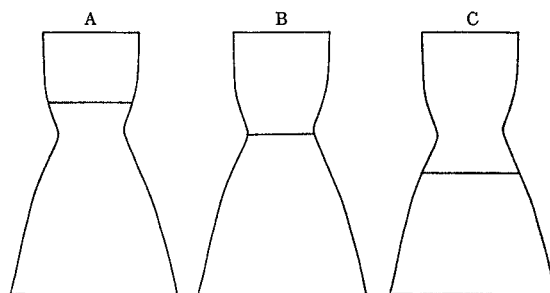


図22 ウェスト切り替えの位置

ワンピースの身頃はパネル切り替えで身体にフィットさせ、スカートはボックス形のタックを取ることでボリュームを持たせた。

ウエストで切り替えることとボリュームのあるスカートでウエストが一層細く見えるようにした。

〈製図〉ワンピース

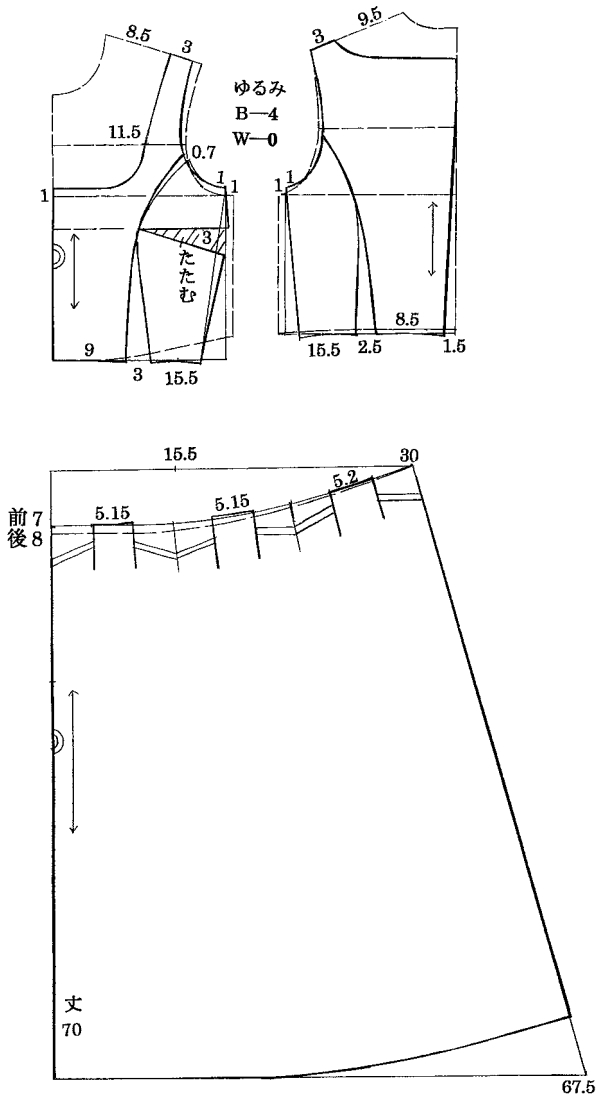


図23

〈縫製について〉

*オーガンジー素材の扱い

裏衿・見返しに同素材のオーガンジーを使用した場合、透けた感じが出なかった。(図24)



図24 オーガンジーの見返し

チュールを使用した場合、表布の邪魔にならず透けた感じでレースの柄がはっきりと見えた。さらに袖口見返しにも同様にチュールを使用したか、袖口に張りが出てボリューム感を出すことも出来た。(図25)

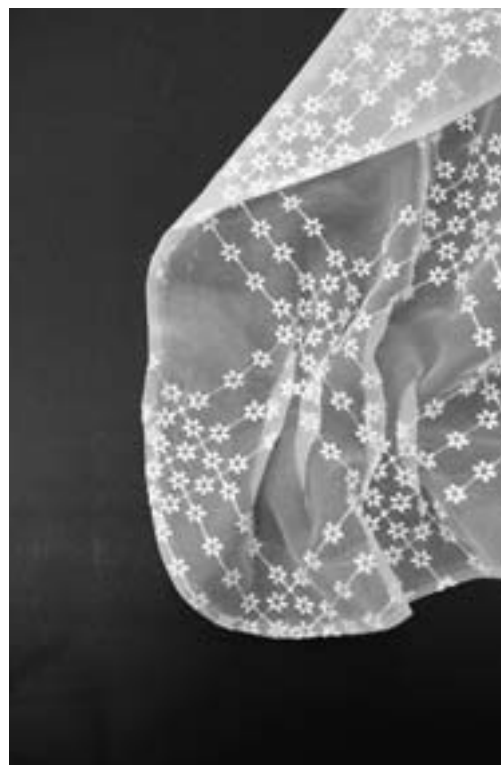


図25 チュールの見返し

まつり縫い

裾、袖口の奥まつりにポリエステル糸90番を用いた場合。まつり目が透けて見えてしまう。(図26)

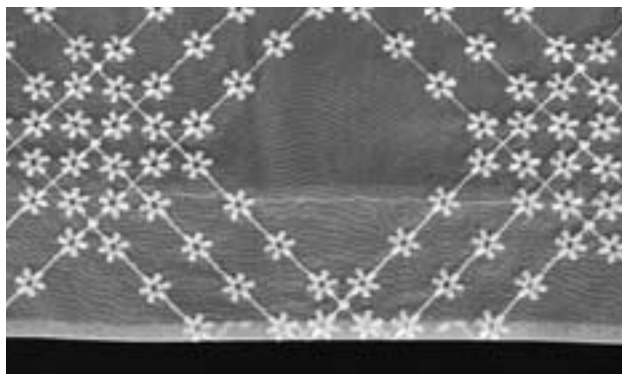


図26 90番の糸でまつり縫い

織糸を使用した場合。布の縦糸を抜きとる。1本では弱いため2本どりにして奥まつりをした。同素材のためまつり目が目立たなくなった。(図27)

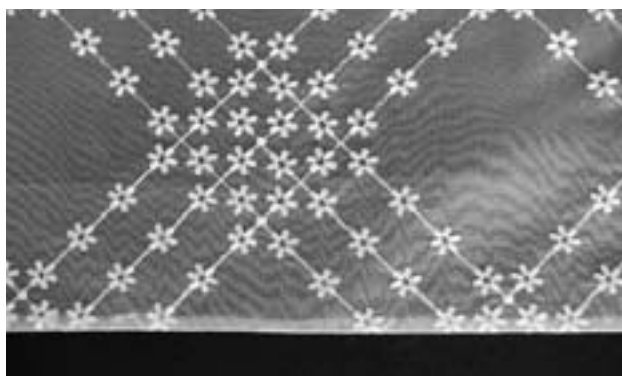


図27 織糸でのまつり縫い

完成作品



図28

—2007年の作品—



図29 2007年作品のデザイン

ベルラインのロングドレス。

今回はデザインというよりも、学生への提案として普段ウェディングドレスで用いることがない素材を使用した作品制作を行った。

ドレス作りでよく用いられるサテン、タフタのようなシルキー素材やオーガンジー、シフォンのような薄い素材だけでなく、ライダースジャケット、パンツなどカジュアルな作品に用いることの多い合成皮革を使用しフォーマルドレスとして制作した。

ハードなイメージの合成皮革をいかに柔らかに華やかなドレスに変貌させるか。また、スカートにボリュームを持たせたことで、スカートの面積が広く重い感じとなるか。合成皮革をいかに柔らかに華やかなドレスに変貌させるかに重点を置き、手芸的な装飾を考えた。花は合成皮革だけでなくオーガンジーなどの薄布を合わせ立体的に作り、葉の部分は布をくり抜くことで軽やかな印象を与えた。

〈製図〉

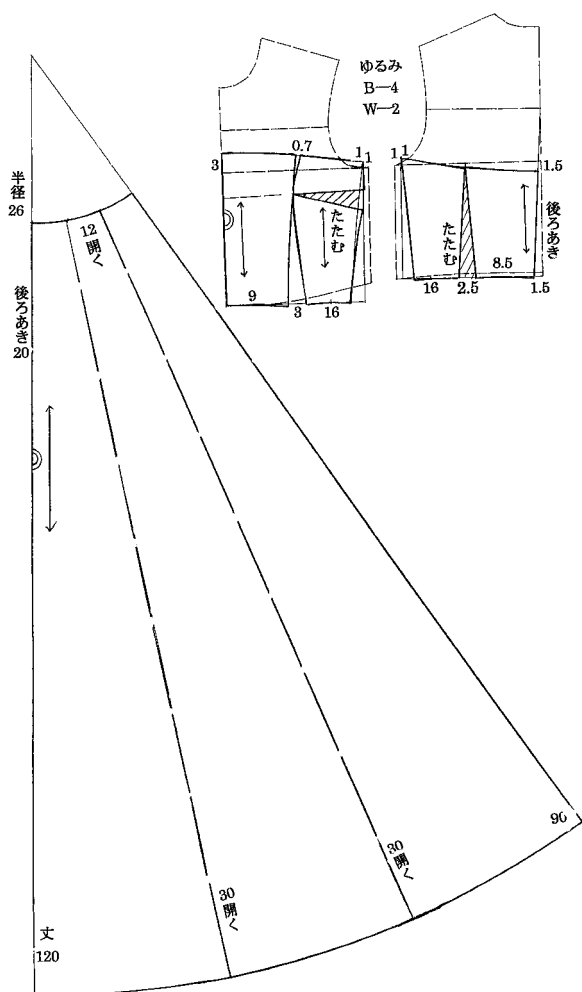


図30 製図

2006度の作品と同じシルエットでウエスト切換えのベルラインのドレスだが、床までのスカート丈とした。スカートにボリュームを出すためウエストと裾で切り開いた。

〈材料〉

表地 合成皮革 表…合成樹脂
ポリウレタン 100%
裏…ポリエステル 100%

花の装飾

ビーズオーガンジー…ポリエステル 100%
ナイロンシャー…ナイロン 100%
クリスタルオーガンジー…ポリエステル 100%
うす絹…絹 100%

合成皮革

裏地 ベンベルグ…キュプラ100%

接着芯 R200

糸 ポリエステル糸 60番

コンシールファスナー

ビーズ (スワロフスキー) 4 mm、6 mm

コード

〈縫製について〉

花びらが4枚と5枚の型を大小合わせて9種を作る。

図は4枚の方は3.5、5.5、7.5、9.5の4種。5枚の方は4.7、5.8、8、10、11.5と5種の型紙を作る。

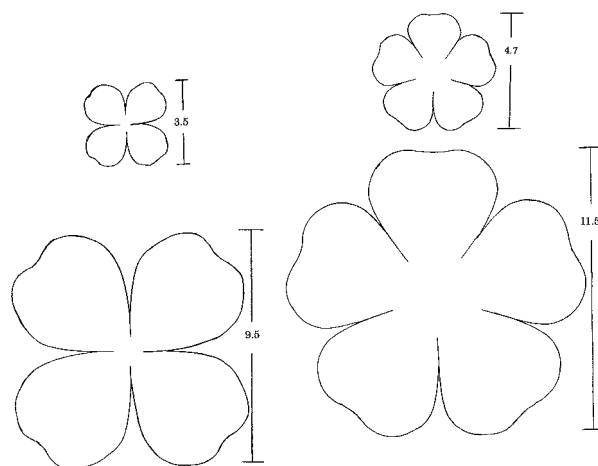


図31 花びらの型紙

合成皮革は、断ち目がほつれないのでそのまま型紙に合わせてカットする。オーガンジーなどの布は、切るとほつれてしまいアウトラインが崩れる。布に型紙をあてヒートカッターで裁断した。

5種類の布を型紙に合わせて、さまざまな大きさにカットした。(図32、33)



図32 ヒートカッターで布を花形に切る



図33 左上…ビーズオーガンジー
左下…クリスタルオーガンジー
中央上…合成皮革
中央下…ナイロンシャー
右上下…うす絹(花形に切られて販売されているもの)

それぞれの花びらは、花コテを使い丸く形作る。

ポリエステル素材のオーガンジーは薄く、熱に弱い
ためそのまま使用。

合成皮革もそのままだと柔らかいため形を保つ事が
出来なかったため、裏面に接着芯を貼った。

花コテ…コテ先は半球状のものを5種花びらの大き
さに合わせて使用。(図34)



図34 花コテ

コテで花びらを丸く形付ける。(図35)



図35 花コテで形を整える

花びらを5枚から10枚、花の大きさにより変えなが
ら組み合わせた。このとき同じ布、同じ花びらが重な
らないようにし、立体になるように合皮、うす絹と
オーガンジーなどの布と組み合わせて中心部分を糸で
仮に止める。(図36)

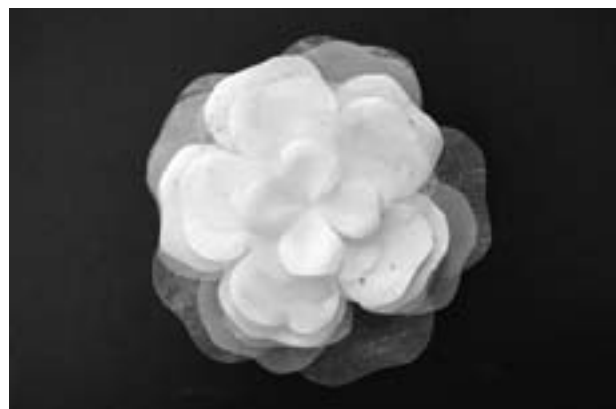


図36 花びらを重ねる

ボディにドレスを着せ、全体のバランスを見ながら
スカートにピンで花と型紙の葉を直接ドレスに止め付
ける。それぞれの配置が決まったら前スカートの型紙
に位置を印す。

花を外し、葉の位置は裏側に印をし、それより
1cmほど大きめにカットしたオーガンジーを印し通
りに仮止めする。葉の印の上を土台布とオーガンジー
2枚一緒にミシンで縫う。コードの先端の始末をする
ため葉の上下部分は2、3針分縫い残しておく。(図
37)

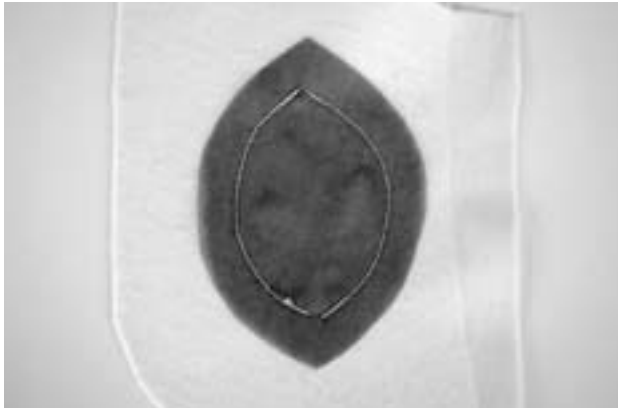


図37 葉形にミシンをかける

ミシン目の0.3cm内側で、土台布のみを切り抜く。



図38 表布を切り抜く

葉の中心と外回り（ミシン目）にコードをのせ裏側から返し縫いで止める。コードの先端は、ミシン目の空いたところから裏側へ入れ、裏側から返し針でオーガンジーにコードを縫い止める。

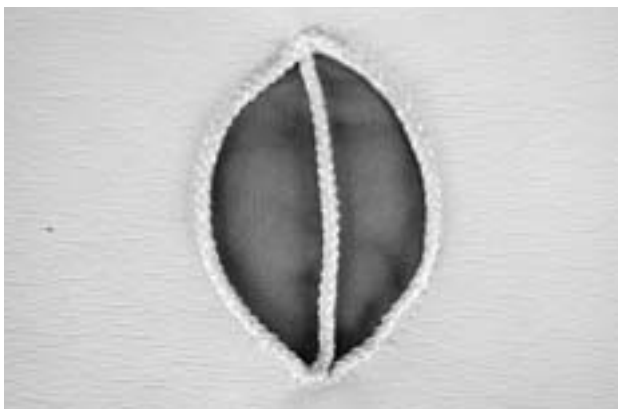


図39 コードを縫い付ける

葉に合わせ花を置き止め付ける。そのとき花の中心に2種の大きさのビーズを1、2個一緒に止める。



図40 スカートに花のモチーフを縫い付ける

装飾の配置の仕方では作品イメージはがらりと変わり、完成度も左右される。配置のイメージを下図A、Bで比較すると、Aの垂直線は上下の方向性が高さを感じさせる。上昇、成長、男性的、緊張、積極的などの言葉を連想させる。

Bの自由曲線は、自由な変化、派手、優雅、上品、複雑などの印象があり、幾何曲線よりも自由な感じがする^(※3)。(図41参照)

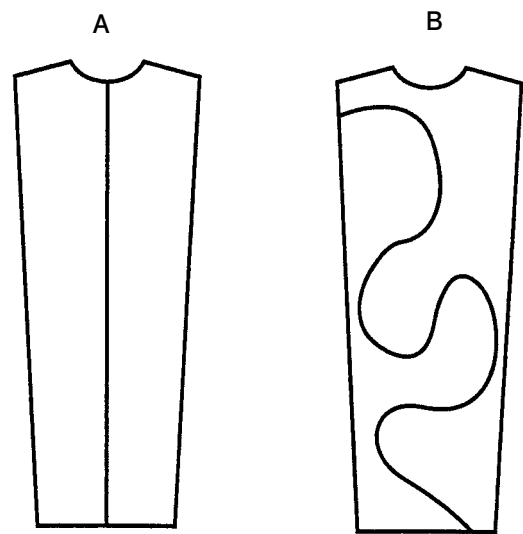


図41 装飾の配置

図41を参考にして、ドレスの裾に花のパーツを配置するときに規則的で硬い感じにならないよう、大小の花を取り混ぜ、左ウエストから裾にかけて流れるようにした。また、安定感が出るようにポイントとなる花は、小さいものを上にし、裾には大きなものを配置した。

*ビスチェ

身頃にストラップが無く、ドレスのシルエットを保つことが出来ないためビスチェとインサイドベルトを付け身頃を固定した。スカートはボーン入りのパニエ

で形を保った。

表布の厚みを考え、身頃より一回りゆるみを減らしたビスチェを作った。布は表に影響が出ないよう薄い布、合成皮革の裏側はメリヤス編のような布と張り合わされていてすべりが悪かったので、すべりの良い布と考え厚手の裏布を使用した。

2枚仕立てにし、表になるほうに接着芯を貼って形を保つようにした。また、身頃の重さを支えるため左右の脇、後ろ身頃にボーンを入れた。

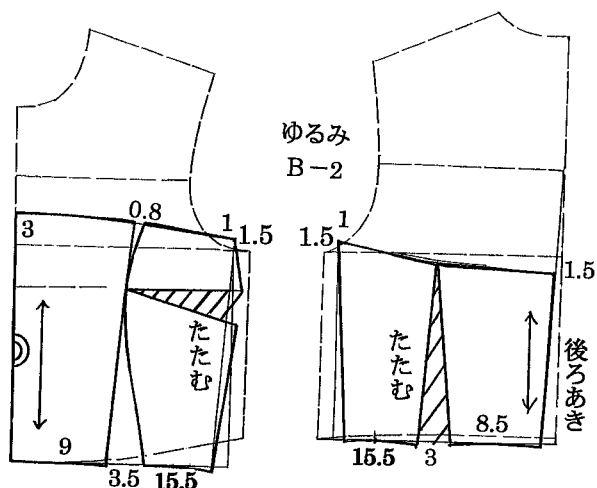


図42 ビスチェの製図

〈材料〉

ビスチェ

布 ツートン…キュプラ100%

接着芯 DX3001

エフロンファスナー 50cm

平ボーン 1cm 幅

グログランリボン 1.5cm 幅

カギホック 1組

身頃の土台と見返しの間にビスチェを差し込むように止めつける。ビスチェのウエスト部分には、インサイドベルトを付けウエストで固定できるようにした。



図43 ドレスにインサイドベルト付きビスチェを付ける

完成作品



図44

IV. 結果・考察

この3点のウェディングドレスは、授業を行う上で学生の参考になるという観点から選び制作を行った。

2005年はロングのマーメイドラインとし、プリンセスラインの切り替え線を用いることで体型を細長く見せることが出来たが、トレーンを付けたことで全体の重心が下がってしまった。身長のある学生は良いが低い学生はさらに低く見えてしまう欠点となる。トレーンの長さを短めにする、広がり分量を減らすなどして軽くし、ヘッドドレスなどを用いて視線が上になるようにして全体のバランスをとるようにした。

2006年のベルラインのワンピースはスカート丈も短くシンプルのため学生向きのデザインであった。薄布を用いたジャケットを組み合わせることでフォーマル感が出た。ジャケットのシルエットや衿の形、スカートのボリュームを変えることで雰囲気を変えることが出来る。また、様々な体型にも応用できる。

2007年のロングのベルラインドレスは、身頃を小さ

くスカートにボリュームを持たせた。装飾もスカート中心に付けて布に動きを出したが、2007年の作品と同様に重心が下になってしまった。

学生が制作するときには、全体を見ながらスカートのボリュームを減らし、装飾的なものを身頃にも付けるなどしてバランスを変える。

フォーマルドレスの場合、ウエストの細さを強調することが重要であった。プリンセスラインの切り替え線、ウエスト線での切り替え線でもウエストを細くすることで繊細さ、優雅さが表現でき、全体のバランスがとりやすくなった。

プ・ジャパン (2005, 2007)

V. おわりに

ウェディングドレスは、花嫁を引き立てる衣裳として学生たちの憧れのドレスであり、学生の作りたいドレスであると思う。決まったシルエットに囚われず多くのシルエットを活かしたデザインをし、さまざまな素材の扱い方、フリル、リボン、ビーズ、刺繍など装飾のテクニックなどの研究を続けていきたい。

年間2単位という短い授業時間で学生達の思い描くウェディングが制作できるよう指導したい。

註

- 1 木曾根かね著『服飾造形のためのデザイン』
東京同文書院 (1983) p. 21.
- 2 木曾根かね著『服飾造形のためのデザイン』
東京同文書院 (1983) p. 23.
- 3 文化服装学院編『服飾デザイン』
文化出版局 (2005) p. 23.

図9. 20. 29 スタイル画 大久保 絢子

参考文献

- 杉野芳子著『図解服飾用語辞典』株式会社 清興社 (2003)
- 田中千代著『新・田中千代服飾辞典』株式会社 同文書院 (2006)
- 木曾根かね著『服飾造形のためのデザイン』東京同文書院 (1983)
- 『新ファッションビジネス基礎用語辞典』株式会社 チャネラー (2004)
- 日本衣料管理協会刊行委員会編集『アパレルデザインの基礎』社団法人 日本衣料管理協会 (2002)
- 軍司敏博著『新被服材料学』株式会社 建帛社 (2003)
- 「HAUTE COUTURE COLLECTIONS」(株)ギャッ